

釜ヶ崎 まちと人の流れ

畑と水たまりの釜のことから／町名とエビス神社／交通の発達でまちができてゆく／新今宮駅ホームから見える空地／飛田について／一九三六年・郡昇作さんの記録から／警察のガイドブックひろい読み／朝日新聞記者がみた釜ヶ崎一九六〇年／「暴動」という区切り

畑と水たまりの釜のことから

——わしらが子供のときの釜ヶ崎は、ネギや菜っ葉の畑ときたない水たまりで、水たまりには猫の死んだのやゴミが浮いていたものだった。木賃やどみたいの、安い長屋みたいなのは、そのころからではじめた。知り合いの老人から、こういう話を聞かされたことがある。

この老人は一九〇三（明治三六）年に、いまの釜ギンザ通りを北へ抜けて、新今宮駅のホームの下をくぐった向う側、水崎町のあたりで生れたというから、話は自分の目でみたことだ。そして残っている記録とも、当りまえのことながら合致する。

老人は、私が釜ヶ崎の東のはずれ、市大病院の真下の

方にいることから、次のようにも言った。

——あの市大病院のあたりは松林のある山でた、若いもんが逢いびきしたりケンカの場所にしたりやった。いまきみがいるのはその山の下、当時はたしか池があったはずや。

老人の生れた年が、よく知られている第五回内国勸業博覧会の年で、いまの新世界、天王寺公園一帯が会場になり、そこへ明治天皇がくるというので日本橋方面のラム街（長町）が関西線より南へ行くと追っばらわれた。いまなら立退き反対闘争になって大変だろうが当時はオカミの命令が絶対だった。

木賃やどみたいの、安い長屋みたいなのがそうして出来はじめたわけだ。

町名とエビス神社

しかし、ドヤと長屋の出来る以前、畑と水たまりの時代にも釜ヶ崎はあった。

西成郡今宮村大字釜ヶ崎字釜ヶ崎というのがそれだ。そして今宮村が町になった一九一七（大正六）年に、大字釜ヶ崎は三つにわかれて萩之茶屋、甲岸、海道となった。それから八年してこのへんも大阪市に編入されたとき、

大字釜ヶ崎が消えて大阪市西成区の甲岸町、海道町、花園町、曳船町などになった。いまはその町名もみんな消されけれど。

ところで、今宮という名前、これは関西線の今宮駅、環状線の新今宮駅に残っているが、名前の起りは次のように伝わっている。

エビス神社、ふつうにはエベッさんという神社のことは御承知の通り、毎年、正月の仕事はエベッさんの祭り（一月十日）がすぎないと出てこない。

参考のために今年のエベッさんのオサイセンを見ると一月九日宵エビス・十日本エビス・十一日残り福の三日間で一億三千万円、人出は八十八万人だったそうだ。ゼニの方は、二十キロ入り麻袋で五十一袋などちゃんと勘定してまちがいない話だが、人出の方はまあそんな見当という程度にいいとけいい。

さて、今の話は全部今宮エビス神社のことなので、もう一つ有名さのに西宮エビス神社というのがある。国道ぞいだから、仕事に行くバスの窓から眺めた人も多いだろう。

この西宮エビス神社の方が古くからあって、今宮のエベッさんはその分れなのだ。つまり、西宮のお宮さんは元宮、あるいは古い宮なのに対して、分れの方は新しい

今の宮というので今宮と変わったわけ。

交通の発達でまちができてゆく

一九〇八(明治四一)年八月に、大阪の市電が難波、今宮の間に通りはじめた。

最初に思い出話を紹介した老人がこの年でかぞえ年六歳、ものごころついた頃だ。

それから三年すると、いまま走っている阪堺線の恵美須町・堺小路の電車も開通、交通機関の発展が釜ヶ崎を畑と水たまりの場所から人の住むまちに変えることになる。

これは、テンノウヘイカのお目ざわりだ、あっちへ行け——というのとちがって現実の生活の便利あったのとだ。

そうして移動してくるいまの日本橋方面、長町一帯にあった長屋の名前が記録に残っているので紹介しておこう。すざまじくてもおもしろくて、だが笑ってしまえない情景が目につく。

その名前はこうだった。

——百軒長屋、八十軒長屋、灰屋裏、桃の木裏、ほおき裏、かんてき長屋、豚長屋、吉野裏、坊主裏、蜂之果

長屋、とんねる長屋、列車長屋、むかて長屋、新台所。

ナニナニ裏というのはいくつもあるが表というのはいくつもない。それに豚とかむかてとか、おもしろくてヒドイ。

一九一七(大正六)年頃の釜ヶ崎については、木賃宿が五十軒ほど、泊り客約三千人といわれ、三千人のうち一夜どまりの客は二百人ぐらいであとは長期滞在の労働者などで、泊り賃は一泊六銭から十銭だったという。

そのほか、飲食店八十軒、酒はドロクが一合四銭、当時もホルモン焼が喜ばれていたそうだがホルモン焼という名はなかったわけで、何と呼んだのかわからない。

新今宮駅ホームから見える空き地

少し横道的なことを入れる。

川口松太郎という小説家。

この人は健在で、いまま小説新潮に「忘れえぬ人 忘れえぬこと」を連載している。

古い方では「愛染かつら」や「蛇姫様」の作者、近年では「しぐれ茶屋おきく」とか「新吾十番勝負」とかもある。

そういう川口松太郎が、若いとき関東大震災(一九二三—大正二二)のあと東京から大阪へきて釜ヶ崎にもいた。

といってもアノコをしたのではない。

いま、新今宮駅の環状線天王寺・鶴橋方面のホームから眺めると、ほとんど目の下に広い空き地ができています。知っている人も多いと思うが、ここにはクラブ化粧品工場があった。道一つへだてた東側の空き地も同じで、こちらはクラブ自転車の工場にもなった。

いまは会社がつぶれ建物もなくなってしまったが、大正の末から昭和のはじめ頃、クラブ化粧品は景気がよくて、出版の仕事もしていたことがあり、雑誌では「苦楽」「女性」の二種類を発行する別会社を作っていた。

若くて、まだ小説家として世に出ていない川口松太郎はその編集者としていたのだ。

それを川口自身が小説のなかで書いているから写してみよう。信吉というのは川口だ。

——この時のプラトオ社は、堂ビルの七階を引き払って、恵美須町の工場の中に、バラック建ての社屋を作り、信吉もその方に移っていたが、それでも経営は毎月赤字で、小山内薫も直木三十五も去って行き、信吉一人が居残って、あせり気味の社長をなだめ、二つの雑誌を続けたいが傾きかけた頼勢の挽回はなかなかむずかしく、信吉の生活も崩れて行くばかりだった。

川口松太郎は当時の自分を小説「飯と汁」のなかでこ

書いている。

そして東京へ戻り、まもなく名作「鶴八鳴次郎」で小説家として世に出た。

そういう川口松太郎の、いわばシノギの場所だったところが、いまや倒産して建物もない空き地なのだから世の中はいろいろだ。

また川口の妻である三益愛子が、あの「がめつい奴」でお鹿婆さんの役をやり、釜ヶ崎の一面を映画に芝居に見せて大当たりをとったというのもおもしろいことだ。

飛田について

ちょっと前へ戻って一九一八(大正七)年の十二月に飛田遊廓が開業している。

ここは昔は高田と書いて、その地図は別のページに。飛田に遊廓が開業する約半年前、一九一八年八月には、富山県ではじまった「米騒動」が大阪へ波及した最初の米屋襲撃が今宮で起っているから、この年はなかなか記念すべき年ということになる。丁度いまから六十年前だ。

ところで、飛田遊廓になっっているあたりが徳川時代の墓地だったことは地図に出てくるはずだが、同時にそこ

はハリツケ、火アブリなどの処刑場でもあった。

この雑誌「労働者渡世」の六号1175年5月発行では、いまも残っている太子地蔵と無縁塔についてふれたが、思えば釜ヶ崎飛田一帯というところは、私たち自身をふくめて昔も今も無縁仏のつきない土地ということになる。それはただアンコ稼業の男だけでなく、かつては外出も自由でなかった遊廓のおんなたちにも共通した運命であつたろう。

遊廓を外界と隔絶させ、女たちの逃げるのを防ぐ役もした刑務所のような高い塀は、いまわずかに平野線飛田停留所に残っている。

現在では押せば崩れそうにもろい感じになっているが、それでも以前には女たちに対する大へんな威圧だったに相違ない。

遊廓につきものの射的屋は大門(西側)を入った左右の横丁に数軒、ついさきごろまであったのに、こんど行ってみたらコルク玉を発射する音はついに聞かれず、横丁は暗かった。(まだ三軒のこっている)

大門(西側)といま書いたが、これはつまり表門で三年ぐらい前までは、華やかなりしころのアーチの残ガイがあつた。パチンコのタイガースから少し南、入ると左手にすぐ交番があり、広い直線道路の突き当り東門には半

円形の石の階段が昔の面影だ。その中間の左手へ折れると北門通り山王二丁目から一丁目の道路で、髪あちやんがやっている立ち飲みのみつわやから、かの有名な東組事務所、交番、天王寺線の低いガードをくぐると尼・平線の府道に出て通天閣が向うに見える。

一九三六年、部昇作さんの記録から

——昭和十一年一月九日に筆者が一日駆けずり廻って発見した屋台店の数は七十六である……という記録がある。

筆者というのは部昇作氏、当時の今宮保護所長、市民館員などをつとめ、戦後には労働福祉センターの職業紹介部長(初代)もやった人の調べだ。

部(こおり)さんの、その足で調べた記録のなかから、現在ではみられないところを書き写してみよう。

——(昭和十一年一月)食事関係の店は三十四ある。その内訳は飯屋十一、すし店八、うどん店七、いも店五、ぜんざい店二、粕汁店一である。宿屋住いのものはこれらの店で腹をこしらえるのである。飯屋の顧客は、ある店は乞食、巡礼、ある店は人夫、手伝いというふうに一定しておる。従って飯屋にもそれぞれの特色があつて、

或る店では一等級の残飯を売り、或る店では二等級の残飯を売る。一等の残飯は糠(ひ)に残ったものであり、

二等は食い残りの手をつけてないものであり、三等は汁や菜で汚れたものである。飯を食う余裕のないものは茶がゆや、ぜんざいや、粕汁で腹をしのぎ、身体を温める。この点よりすればスラムは食欲の街であり、飯屋の街である。——

食欲の街であるのは今も変わらないが、残飯食堂はまったくみられない。この点、武田純太郎の小説「釜ヶ崎」にも残飯やが出てくるのが時代の特徴を示しているわけだろう。

部さんは最初にあげた屋台店七十六の内訳について、そのうち六〇が食いもの関係の店だったと次のようにも書いている。

——廻転焼五、シナそば一、おでん二、うどん四、カツレツ一、洋食焼(お好み焼)十二、菓子十二、餅二、だんご一、いも六、関東煮十四。——

このうち、おでんと関東煮が別々になっているのは、おそらくおでんは味噌でんがくだったと思われる。

さらに部さんは、街の状況をさまざまな角度から調べた結果を書いているので、長いけれどもそっくり紹介してみたい。

いまと違ふ点、そっくりな点は読者各自の判断にまかせよう。

——以上(の調べ)を要約するならば、スラム今宮は首切り地藏尊を中心とする十五の地藏尊の街であり、簡易宿の街である。また無宿者の街であり、売笑婦や男娼の街であり、賭博の街でもある(中略)次にこのスラムは乞食、巡礼の街であり、石ケン、針、タワシ等の行商人や、手伝い、人夫、立ちん坊等の日雇い労働者の街でもある。また窃盗、傷害等の刑余者の街でもある。梅毒、栄養不良、結核、不具、麻痺等の病人の街であり、行旅病人と行路死亡者の街である。酒、焼酎、泡盛等のアルコールの街であり、関東煮、すし屋、駄菓子屋、飯屋等の飲食店の街である。女紹介屋の街である。古下駄の街である。古靴の街である。古着の街である。古物の街である。古物屋が金銭機関の街である。また屑の街である。単に大阪市のみならず堺市の屑も、郡部の屑も大半は一時このスラムに集合するのである。従って今宮は屑拾いの街であり、屑買い、灰買い、綿ムシロ買い、古着買いの街なのである。よせ屋の街なのである。

警察のガイドブックひろい読み

郡昇作さんの調べから約十年の間に、日本は「大東亜戦争」というやつで大きく変化したのだが、釜ヶ崎がその当時にどんな具合だったか、いまのところ紹介できる資料が見当たらない。

戦争中、ドヤ住いの者に食糧(外食券)の配給はどうなっていたか。衣料切符というのがないと手拭い一本も買えなかったろうとか。それよりも兵隊にとられなかったか軍需工場へ徴用されなかったか。ドヤで暮らしていたのか、大体ドヤという商売は戦争中でもやっていたのか……

このへんのことを、ドヤの方の組合なら相当わかっていと思うが、何しろ近年のドヤの営業者は、おとくいさんである労働者をテキのように考えているらしくて、こちらの希望する話など一切しやうとしない。まあ、ヤミに葬ってしまいたいような儲け方をしているせいでもあろうけれど。

そこで警察のことだけ、前にも釜ヶ崎手帳のページで紹介したのでくり返してみる。

ここで使った資料は大阪府警察本部警務部教養課発行(昭和47年2月)の「NEW OSAKA CID」^①と横文字の名前がついた本で、大阪府全体を警察の管轄とに分けて歴史を語り、名所を案内している。

ずいぶん広い範囲だが、これを隣り合った各警察署管内の指定と合わせるともっと広い。

——阿倍野署管内 阿倍野市場 阿倍野区旭町一丁目六番地及同六九番地付近、阿倍野筋一丁目六九番地。

——天王寺署管内 阿倍野市場 天王寺駅前付近。

——南署管内 新世界市場 恵比須町一丁目、同二丁目。

まだ浪速署がなく、南署が新世界も管轄にしているが、これは夢するに全部地つづきの大ヤミ市ということだ。

この状況について、自分でも店を出したことがあるという詩人の竹島昌威さんは次のように書いています。

——天王寺駅前の闇市では、駅前から尼・平線歩道を霞町まで延長された広大なもので、北を望めば焼跡に建つ高島屋、旧松坂屋、そごう、大丸まで手のとどくように眺められた。こちらは第三国人とそさないものの、地元のヤクザが縄張り、一平方メートルに満たない面積で、十円の場所代をとっていた。五円のオカユ、一杯十円の銀めしを食べるのに苦勞する日が続く……(大阪春秋九号・大阪昭和五十年史のうち)

この広大なヤミ市は、大阪駅前、鶴橋その他指定された九十二のヤミ市と共に、一九四六年八月一日、一斉に閉鎖された。

そのうち「ベッドタウンと中少企業のまち——西成署管内」の部から——

西成署は一九一九(大正8)年四月、住吉署から分離独立した今宮署ではじまった。西成署と改称したのは一九四三(昭和18)年一月、戦争の最中で一九四五(昭和20)年三月十四日の空襲で全焼した。焼けたあと萩之茶屋小学校が仮庁舎とされ、三年後に現在のところへ木造の建物が出来た。それが鉄筋三階建てになったのは一九五八(昭和33)年の三月、「第一次暴動」の三年半ほど前だ。もしもまだ木造建物で「暴動」に直面したらどうだったろう? それにさらに増改築されて、公園の一部も削り取ってしまったのは、あれは何年か、工事は毎日眺めていたのに(施工・小坂井組)はつきりおぼえていない。

一九四六(昭和21)年三月二十四日、当時の大阪府知事田中広太郎の名で大阪府告示第三百八十九号というのが出された。

名目だけの配給に代って民衆の生活を支えていた物資の自由流通、いわゆるヤミ市を閉鎖する命令で、これがやはり各警察の管轄ごとに指定している。

西成署管内は三ヶ所で、その第一はこうなっている。

——飛田市場 西成区山王一丁目、同二丁目、同三丁目、同東田町、東今池町。

いま霞町から天王寺駅方面へだらだらのはりの尼・平線を行くと、南海の踏切りをすぎたすぐ右側、カバン屋、靴屋、洋服屋などが十軒足らず並んだ一角がある。その一部はすでに府道拡張のとりこわしてフェンス張りの空き地だが、眺めればどことなくヤミ市の名残らしき感じもなくはない。半地下の常設のバクチ場があり、男娼がたえずみ、向い側の歩道には一軒だけ、アセチレンガスをあかりにした飲み屋がいまも店を出すのである。

朝日新聞記者がみた釜ヶ崎一九六〇年

一九六〇(昭和35)年は「第一次釜ヶ崎暴動」の前年。この年二月九日、朝日新聞では「大阪のどん底釜ヶ崎Vに住んでみて」という特集を社会面ではじめて十二回つづけた。

当時は朝日新聞も「あいりん地区」なんて妙な名前は使わなかったのである。これは名前がなかったから使わなかったというよりも、役所がこうといえはすぐ従う体質の実にいい証拠なのだ。

さて、その「住んでみて」の記事を書いた柴田俊治さんの、新聞にのせなかった思い出話があるから紹介しよう。以下、ぼくとあるのは柴田さん自身だ。

――ぼくの記憶では、三十五年の新年は、きびしい寒
気であけた（中略）一月早々、釜ヶ崎へ行った。

衣裳はぜんぶ萩の茶屋前の露店と東田町のつるし屋
で買ったのだが、これは失敗と思ったのは、地下タビを
はいていたことだった。地下タビは、働く意志と習慣を
象徴している。ぼくはとにかくぶらぶらしに行つたのだ
から、似合わない。片チンパのつっかけを拾って、はき
かえた。

（中略）釜ヶ崎生活の話は、いくらでも集つたが、この
ひとびとがどうしてここに来たのかは、聞き出しにくか
った。由来、女は身の上話をするのが好きだが、男は過
去を隠したがる。口を割つても、いい話ばかりする（中
略）

建設現場へ行ってコンクリートをかきまぜたり、パタ
屋についていてゴミ箱をひっくり返したりしたが、み
んなさみしい人間ばかりだった。自分では世の中を見離
したようにいいながら、実は、世の中から見離され、酔
えば、毒づき、からみ、果てはぶつぶつとつぶやくばか
りで、なにもいわなくなる人間ばかりだった。

一般に、貧しいひとびとの暮らしには、暖かさがある
と考えられている。貧しさが極限までいくと、人間が人
間らしさを捨てて、いっそ気楽な人生になるのではない

かとも思われている。今のことはといえば「無重量状態
」というやつである。そして、だれもが、この人間とい
うよろいを脱ぎすててしまいたい心情をもっている。ぼ
くが、釜ヶ崎に行つた心底にも、そんな一種のあこがれ
があった。

柴田さんはまだ書いているがここまでにしておこう。
これは「暴動」というそれまでになかった経験をする前
の、釜の者のすがたをある程度までとらえた記者の目、
といつてもいいだろう。新聞記事としてではなく、自分
の思い出を語っているからということもある。

引用は「中之島三丁目三番地 大阪社会部戦後二十年
史」という大阪朝日社会部編・発行の非売品の本からし
た。そういえば府警政経課編のガイドブックも非売品だ
った。

「暴動」という区切り

さだたくさん書きたいことはあった。

しかし、釜ヶ崎概略史みたいなのは、一旦ここで区
切るのがいいと私は思う。

あとは「第一次暴動」を境目とした別の概略史に引き
ついてもいい。それはすでに「暴動実録史」をやっ

た岩田秀一が、いままでの長い休筆期間
に蓄えたことであろし、別の面では「
労務者の歴史」の筆者がやがて明らかに
する釜ヶ崎Ⅱまち×人間×仕事×生き方
の総括として展望としてあらわれること
でもあろう。

単純に、まちの外見がどう変つたかの
現象を集積してみるのもおもしろい作業
だったはずだが、それは準備不足で着手
する気にもなれなかった。

代りに、何枚かの最近の写真、まちの
外見変 に関係したものを添える。

郡昇作さんの「日本の玄関 釜ヶ崎」
をもっとも多く参考とし、引用したほか
「大阪焼跡闇市」「さかえゆく大阪の地
誌」その他多くの本を参考にした。

(16)

